魔女狩りのプロローグ

濠門長恭

目次

１：悪魔狩り ..... - 3 -
２：神聖交感
３：悪魔祓い
４：異端狩り
５：魔女拷問
６：交感途絶
後書き

１：悪魔狩り

一糸まとわぬ裸身を真夏の陽光に晒し、背丈よりも大きな十字架を高く掲げて、滑るように焼け野原を進む少女。成熟しきらぬ乳房と、まだ子は孕めぬのではないかと危ぶまれる細い腰。長い金髪と、純白の肌。

後ろには、様々な服装をした十二人の老若男女が従っている。革鎧に身を固めて腰に長剣を帯びた下級騎士。長い鍬を肩に担いだ中年の農夫。棍棒を握りしめた上半身裸の若者。杖を突きながらも矍鑠（かくしゃく）と歩む老人。殿（しんがり）には弓矢を携えた村娘。

一行の行く手に、焼け野原を畑に耕している五十人ほどの人々が見えてくる。半数は隣村の住民だが、領主の命で遠くから呼び集められた者も交じっている。

少女は一団の五十歩ほど手前で立ち止まり、十字架を地に立てて左手で支えた。少女に付き従っている十二人は左右に散って、大きな半円で少女と一団を囲んだ。

「我は神子（みこ）なり。人々に害を為す悪魔の手先、

すなわち悪魔憑きを追っている」
　少女が透き通る声で呼ばわった。
「我とともに悪魔憑きを狩る者、我が横に立ち並べよ」
　人々は驚いているが、驚愕というほどではない。少女の全裸に複雑な表情を浮かべているが、露骨な嫌悪や好色あるいは羞恥の色は薄い。好奇心を丸出しにして少女を熱心に眺める子供の目を遮ろうとする大人もいない。
　二週間前に突如として現われ、悪魔憑きを捕らえては真人間に戻す少女の噂は広く知られていた。
　少女は両手両足を広げて、誇らしげに裸身を強調した。
「我が肌を見よ。悪魔との契約の印などどこにも無いと、おのが目で確かめよ」
　契約の印を隠していないと十全に明かすために、少女は首から下の体毛をすべて剃っている。蠱惑的にくぼんだ腋の下も、ふっくら盛り上がった下腹部の丘も、そこに刻まれた一本の溝とかすかに顔を覗かせる肉片も、すべてが衆目に晒されている。
　少女の言葉に引き寄せられるように、男ば

かりが十人ほども集まってきた。前から後ろから、ためつすがめつ裸身を眺め、しゃがみ込んで股間を見上げる男さえいた。
「得心がゆかねば、肌に触れてもみよ。どこにも悪魔の種子など埋め込まれておらぬ」
　少女の正面にしゃがみ込んでいた中年の男が、弾かれたように立ち上がった。
「いや、じゅうぶんにわかりました。たしかに、あなたは神子様です。悪魔狩りに加えてください。どうか、俺に祝福を」
　男はあらためて片膝を突いて、頭を垂れた。
　少女は十字架を両手に持って、男の頭上にかざした。
“Open name list. Behold the man. He is a temporaly my disciple.”
　厳かに神の言葉を紡ぐ神子。聞く者に言葉の意味はわからなくとも、神の軍勢に加わったという誇りが、沸々と心にみなぎってくる。
　五十人のうち三十人までが名乗りを挙げたが、神子は現在の信徒と同数の十二人までに留めた。
「新たに加えた者達は、追っている悪魔憑きを捕らえし後は、この地に戻す。長くとも一

両日は掛からぬ。それまでは人手が足りぬだろうが、我慢してもらいたい」
「とんでもない。畑を荒らされちゃあ、開墾もなにもあったものじゃないです。是非とも悪魔憑きを退治してください」
　神子は十字架を高く掲げた。天空を仰いで神の言葉を唱える。
“Multi range seeker……invoke!”
　銀色に輝く金属で作られた十字架の中ほどには、黒い横長の板が取り付けられている。その板に色鮮やかな光の線が浮かびあがって、複雑な波模様が躍り始めた。
　ゆっくりと十字架が向きを変えて、ぴたりと止まった。波模様が動きを止めて、光の輪が外から内へと縮んではつぎの輪が描かれる。
“Target detected. Identify coordinate.”
　神子が十字架の指し示す方角へと歩み始める。
　二十四人に増えた信徒たちも神子の後を追う。神子は素足で、焼け野原を滑るように進む。ゆったりと歩んでいるように見えて、小走りほどにも速い。じきに信徒たちの額には汗が浮いてきたが、神子は涼やかに、ほとん

ど宙を滑っている。
　焼け野原が草原に変わり、やがて行く手に雑木林が見えてくる。
「おい、このまま進むと……」
「悪魔憑きは鎖された森へ逃げ込むつもりなんだな」
「やばいんじゃないか？」
　人々が囁き交わす。鎖された森の奥には、数百年の昔には地方全体を領していた一族が逼塞しているという。森から出て来て他者に害を及ぼすことはないが、斧や弓矢のような金属を帯びて森に踏み入った者は行方知れずとなり、誤って迷い込んだ者はとんでもない遠方の地へ放り出されるという。
　雑木林の中に人影が見えた。三人五人、いや八人ほどもいるだろうか。
“Tally-ho! Target insight!”
　神子が高らかに叫んだ。
「村の者は三手に分かれよ。四人は右手を先行して、悪魔憑きの側面にまわれ。樹に邪魔されてもかまわぬ、矢を射掛けよ。四人はまっすぐに追え。残る四人は左からゆっくりと、悪魔憑きを林から追い出すように間を詰めよ。

新たに加わった十二人は、我に続け」

命令を与えると、神子は十字架を槍のように構えなおして、林の縁に沿って突き進んだ。

十二人は懸命に追うが、しだいに距離が開いていく。

不意に神子が立ち止まった。

ザザザッと樹々を掻き分けて、悪魔憑きどもが三十歩の間近に現われた。得物は木の枝すら持っていない。五人の男女が、素手で神子に襲い掛かった。

左右に広がった五人の中央に十字架の先端が振られた。

ヒイイィィィンンン……

若い女の悲鳴にも似た甲高い音が十字架から発せられて、すぐに消えた。

五人が両手で耳を押さえて、その場に崩折れた。

十字架からは、音ではない圧力が放射され続けている。五人が動かなくなった。

後ろに控えていた三人が、神子に向かって突進した。初老の男と若い娘、そして年端もいかない男の児。

ヒイイィィィンンン……

ふたたび十字架が咆えた。しかし、三人には効かない。
左から若い娘、右から男の児、正面からは初老の男が、まったく同時に神子に飛び掛かった。まるで群狼のごとき素早く獰猛な、そして統制がとれた襲撃だった。
神子は十字架で空間を水平に薙ぎ払った。男の児の頭上を越えて、初老の男の脇腹に十字架の横木が食い込んだ。
ガシン！
太い幹に斧が叩きつけられたような重い音が響いて、神子は十字架を取り落とした。
三人が殺到して、神子を押し倒した。
「赦せ。身を護るためには主義を枉げるしかないのだ！」
男が神子に馬乗りになって、両手で首を締めに掛かった。
「ぐ……」
凄まじい力に、神子は息を詰まらせた。
「うおおおおおっ……！」
「ぎゃああっ……！」
神子を救いに駆け付けた十二人が、娘と男の児に跳ね飛ばされ投げ飛ばされ叩きつけら

れている。
　ヒュウウウウウウウウ……
　十字架が低く唸った。
　神子の全身に新たな力が宿った。渾身の一撃を男のこめかみに叩きつける。
　男を突きのけて、弾けるような勢いで神子が立ち上がった。悪魔憑きに特有の人ならざる動きよりも素早く男の背後にまわって、首筋に手刀を叩き込んだ。男が倒れる。
　神子は二十歩の距離を跳躍して、娘と男の児の背後に迫った。
　娘の首筋にも手刀を叩きつけ、男の児には鳩尾を突いた。
　神子が、ガクリと膝を突いた。全身が汗で濡れている。
「悪魔憑き、どもを……縛り、あげよ」
　四つん這いになって身体を支え、掠れた声を絞り出す。肉体が破壊される寸前まで力を振り絞って、今は――神に聖別された身という使命感だけが、神子を支えている。
「我と戦った、三人は……とくに、厳重に縛せ。悪魔に……格別の力を授かっている」
　地に落ちる短い影がわずかに伸びて。よう

やくに神子は任務遂行に耐えるまでに回復した。

まず、十字架で倒した五人を検分していった。上半身を裸にして、探査針を肌の上に滑らせていく。首に近い背骨のところで、柄が赤く光った。探査針の先で周囲をなぞって、肌と見わけのつかない皮膜を剥がす。浅いくぼみの中に黒い円形の穴が穿たれ、奥に寸足らずの百足のような悪魔の種子が植え付けられていた。胴が四角の百足は周囲に微細な針金のような脚を持ち、その一本ずつが深く肉に食い込んでいる。

五人のうち三人が、同じ場所に種子を植え付けられていた。一人の男は腰骨の上で、女は頭頂部で種子が見つかった。

神子が十字架の基底部から細長い箱を取り出して、その先端を悪魔の種子が埋められた穴に押し込んだ。

「暴れないよう、しっかりと取り押さえていよ」

しかし、その必要はないほどだった。八人とも観念したのか、無駄なあがきと心得ているのか、敢えて逆らおうとはしない。

“Restore Procedure Start!”

神子が、細長い箱の側面にある突起を押した。

ピクンと、悪魔憑きの身体が震えた。しかし、それ以上のことは起きていないように、信徒たちには見えた。

しかし。ゆっくりと百を数えるくらいの時が過ぎると。ガクンと悪魔憑きの頭が垂れた。信徒たちが押さえていた手を離すと、そのまま地面に倒れ込んだ。

“Override operation system uninstalled.
Prejudice doctrine & unrealistic delusion projecting subsystem deleted.
Muscle power unlimiter DLL deleted.
Values normalization program installed.
……Restore succesed.”

神子は、正常化した者の縄をほどくように命じた。

「悪魔の種子は、すでに肉体の奥深くまで根を下ろしているので、無理に取り除けば、この者は死ぬ。故に、我は管理者の力を借りて種子を封印した」

封印してしまえばまったく害はないのだと、

神子は説明した。種子に操られていた記憶は消し去り、封印と同時に管理者の正しき英知を注入したから、これからは人の範たるべき行ないばかりをするだろうとも付け加えた。悪魔の呪詛から解き放たれた者が村人たちに迫害されぬ配慮だった。

神子は五人の悪魔祓いを順調に終えて、ひと休みしてから、とくに悪魔から大きな力を授かっている三人に取り組んだ。

厳重に縛ったまま衣服を切り裂いてまで身体を検めたが、悪魔の種子は見つからなかった。

しかし、神子は動じない。

「下穿きも脱がして素裸にせよ」

信徒たちのあいだに、かすかなざわめきが起きた。乙女が口にすべき言葉ではない。しかし。その乙女自身が、悪魔の種子をどこにも宿していないと潔白を示すためにとはいえ、素裸になっている。どころか、羞恥の源をわずかに隠す飾りまで剃り落としている。

悪魔に憑かれた人間を奪い返すためにも、ちっぽけなことにこだわっている場合ではない。たちまち、三人とも素裸にされた。

男はともかく、若い娘も羞恥を感じているふうではなかった。縛られた身体を投げ出して、ぼんやりと宙に視線をさまよわせている。
三人は地面に横たえられたまま、両脚だけを高く吊り上げられた。
「あった……！」
三人ともが、会淫部に他の五人よりもひとまわり大きな種子を植え付けられていた。それも二つずつ。
神子は信徒たちに命じて木を伐らせ、即席の磔台を作らせた。
最初に、初老の男が逆さ磔に掛けられた。
神子が悪魔祓いの筒に刻まれている模様を撫でて、その機能を切り替えてから、悪魔の種子が潜む穴に差し込んだ。
“Start procedure!”
先ほどよりも長い時間を掛けて、悪魔の種子のひとつが封印された。
“Behavior standard libraly rewrote.”
神子が悪魔祓いの筒を引き抜くと同時に、男が暴れはじめた。
「うをおおおおっ……がああああっ！」
獣のように吠えながら、逆さ磔から逃れよ

うとして全身を揺さぶる。俄か作りの磔台がギシギシと軋む。

神子が十字架を水平に構えて、男の顔に向けた。

ヒイイィィン……

法力の直撃を受けて、男が意識を失った。

神子は悪魔祓いの筒を再調整して、その機能を切り替えてから、二つ目の穴に挿入した。

“Restore procedure start!”

今度は、ゆっくりと百を数えるほどの時間で処置が終わった。

男が磔台から下ろされて、娘がそこに縛りつけられた。

“Start procedure!”

しかし、神子はすぐに悪魔祓いの筒を引き抜いた。

“Protection program is running!”

神子は娘の股間を左右に割り広げて、中を覗き込んだ。

膣の奥深くに、長方形の種子が植え付けられていた。百足の脚のごとく、何本もの微細な金色の針金が種子から突き出て、柔肉を貫いている。真っ黒い長方形をした種子の中央

に、透明な膜が被さっている。
「これは……？？」
　神子は、娘を磔台から下ろして厳重に緊縛しておくよう、信徒たちに命じた。
「この者は､直接に悪魔の庇護を受けておる。今の我には封印を施せぬ」
　最後に残った男の児が磔に掛けられた。種子の大きさは変わらないので、股間に穿たれた穴がひどく大きく見える。
　最初の種子に封印を施しているときだった。
「ちがうちがうちがう……！」
　男の児が泣き叫び始めた。
「まちがってるよ！　いのちがいのちをころしてたべるなんて……ぜったいにまちがっている！」
　男の児の身体が激しく痙攣して、それきり動かなくなった。
“Fatal error……!!”
　神子が悲痛に叫んで、悪魔祓いの筒を抜き去った。
「この児を下ろして……早く！」
　信徒たちに命じただけでなく、男の児を縛りつけている縄をみずからの手でほどきにか

かった。
　神子は、地面に横たえられた男の児に馬乗りになって、強く押しつけるように両手で胸を何度も揉んだ。十回繰り返してから、唇に口を押しつけて息を吹き込む。そうして、また胸を激しく揉む。
　それを十回も繰り返してから、神子はゆらりと立ち上がった。
「この児は、悪魔の種子を封印したときの衝撃に耐えられず、肉体が滅びた。しかし、魂は浄化されて時空の彼方におわします管理者の御許に旅立った。この児の魂の安らけきことを、我も祈る」
　神子は、心底そう信じているのではない。時空の秘密を垣間見るにつれて、その根本教義が聖なる書物に書かれてある教えと矛盾しているように思えてきた。しかし、Lateral side に堕することなく世界を Vartical side に、星々への道に導くには、人々が期待するごとくに神子として振る舞わねばならない。
「悪魔の種子を封印した六人は、家に帰せ。明日からは、良き隣人、良き家族として平穏で幸せな暮らしを築くであろう。しかし、こ

の悪魔に庇護された娘は……」
　このまま女子修道院まで運べと、神子は命じた。
　神子は十字架を肩に担いだ。それまでとは打って変わって疲れ果てた足取りで、来た道を引き返して行くのだった。

「神子様にも祓えないてこたあ、この娘っ子が実は親玉ちゅうわけかい」
「どうも、女の穴にも悪魔の種子が巣食ってるらしいな」
「やっぱり、女は恐ろしいや」
「あそこに受け挿れたんなら、悪魔憑きてよりも悪魔と結婚したってことか？」
「そうならいいんだがな」
「なんだと？　悪魔との結婚を認めるのか、てめえ！」
「そうじゃねえよ。悪魔の花嫁なら、世界中に一人だろ。それなら、これで去年からの騒ぎは一件落着すると思ってな」
「ああ、ことに春先の大洪水はえれえ目に遭ったかんな」
「あれのおかげで野焼きが四か月も遅れて、

今年の種蒔きが難しくなったんだぜ」

人々の話は、悪魔憑きどもが及ぼしてきた害悪のあれこれへと移ろっていった。

農地への直接の悪行は、雪解け水を氾濫させて草原を水浸しにした、その一回きりだった。悪魔憑きが頻繁に行なっている悪行は、害獣を捕らえる罠を壊したり、山裾に張った鳥網を破ったり、あるいは鳥小屋を壊して家禽を野に放ったり。肉にする予定の年老いた牛馬を逃がしたり。教会の裏庭に忍び込んで、神に捧げられるはずだった山羊を逃がすこともしばしばだった。

この一年間、だんだんと悪魔憑きどもの悪行は頻繁に、かつ大掛かりになってきた。いや、そもそも、そういった災難が悪魔の種子を埋め込まれた近隣の者によってもたらされていたという事実を村人が知ったのは、二週間前に神子が女子修道院から遣わされて、しかし言葉では納得できず、悪魔祓いの秘蹟を目の当たりにして後のことだった。

この二週間で、神子は村人たちの協力を得て、三十人を超える悪魔憑きを真人間に戻してきた。それほどの人間が、いつどこで悪魔

の種子を植え付けられたのか――尋ねられても、神子は答えない。彼女自身も知らないのか、あるいは村人たちが憶測する通りなのか。
　新たに募った十二人と別れ、最初の十二人を集めた村への道を辿る一行は、修道院への分かれ道で、年老いた修道女に行く手をふさがれた。
「その娘を修道院へ入れてはなりません。また、村へ入れることもかないません」
　神子の手に負えない悪魔の種子を宿しているからには、さらに別の悪意ある種子も植え付けられているかもしれない。悪魔に対抗し得る唯一の力を持つ女子修道院の様子を、娘を通して悪魔がうかがい知る恐れがあった。村には十字架でも探知できない悪魔憑きが潜んでいて、娘を救けようとするかもしれない。
「では、どうすればよろしいのでしょうか、お母様？」
　もちろん、年老いた修道女は神子の実母ではない。女子修道院の長は、このように呼ばれているのだった。
「そこに楡の大木があります。娘はそこに縛りつけて、四方に見張りを立てなさい。見張

りは一昼夜に四回ずつ交代しなさい。食事を与えるときも縛りつけたまま、必ず二人がかりで食べさせるのです」
「けどよう、糞小便は……ええと、排泄のときは、どうすればよろしいんで？」
　聖職者への遠慮で、村人が言葉を選んだ。
「垂れ流させなさい」
　卑猥で無慈悲な言葉が、老女の口から発せられた。
「皆様の手を煩わせてすまなく思いますが、せいぜい二日か三日のことです。その間に、新たなる悪魔祓いの手続きを工夫します」
「うまくいくんでしょうね？」
「そのように努めます」
「けど、また失敗したら……」
「腐った林檎は樽から除かねばなりません」
　神子が信徒に命令する口調に、どこか似ていた。
　娘は――裸身を検めるときに破れてしまった襤褸布を身体に巻きつけた、見ようによっては神子の裸身よりも扇情的な姿で、大木に縛りつけられた。
　背中に大木を抱いて立ったまま、手首は太

い縄で何重にも縛られ、足は木の根を挟んで左右に開いた形で縄を後ろにまわされた。そのままでは前につんのめって肩に負担がかかるところだが、女子修道院長が用意してきた太い鎖が、腰と胸を幹に縛りつけた。

このように用意周到なこと、そもそも悪魔祓いの様子を女子修道院長が知っていたことを、村人たちは不思議に思わないでもなかったが――十字架で悪魔憑きを探し当てたり、指のように細く短い器具で悪魔の種子を封印する秘蹟に比べれば、たいしたことではないと、口に出すまでもなく得心している。

村人のひとりが心配した事態にそなえて、娘の下半身から襤褸布が引き剥がされた。

「食事を与えるときも木匙を使うなどして、娘の肌には触れないように。隠された種子が、触れた者に乗り移るかもしれませんから」

それは――見張りを四人も置いて互いに牽制させたと同様、娘が辱めを受けないための方便だったが、もちろん村人たちは震えあがったのだった。

「では、私と神子は修道院へ戻ります。この娘を悪魔の手から奪い返す方策を、時空の彼

方におわします管理者にうかがって参ります」

女子修道院に属する女たちは、世界を創造した神に仕えているのではない。創世の瞬間は無限にも等しい百数十億年の昔に終わり、新たに神から遣わされた人の子も千年以上の昔に失意のうちに滅んで――造物主はすでに時空連続体の彼方に去った。今は、その一区画のみを託された管理者が大地と海と生命とを見守っている。そのように、女子修道院に属する女たちは信じている。

人の王と神とをつなぐ教会の教えとは相容れない信仰ではあったが、悪魔憑きの跳梁になんら手を打てない教会にしてみれば、女子修道院と対立するのは得策ではない。

そして、ややこしい教義とは無縁の人々にとっては、造物主であろうと管理者であろうと、神様は神様なのだった。『天にまします我等の父』も『時空の彼方におわします管理者』も、つまりは神聖な呪文でしかなかった。